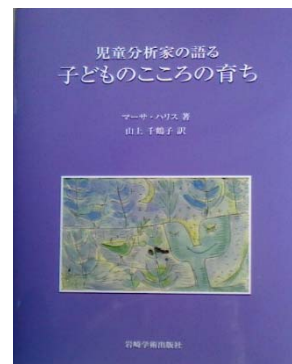


— ご挨拶 —

此の度、「岩崎学術出版社」からマーサ・ハリス(Mrs. Martha Harris)の著書「Thinking about Infants and Young Children」(邦訳名; 児童分析家の語る 子どものこころの育ち)が翻訳出版されました。マーサ・ハリスは、タヴィストック研修留学時代のわが恩師でありまして、タヴィストック伝統の^{いしづえ}礎的存在であります。今回の翻訳出版は、わが国に於ける彼女のデビューを記念するものとなりましょう。本書は、来る12月23日(金曜)小寺記念財団主宰の《タヴィストックセミナー》で催される講演のテキストに予定されております。因みに、講演タイトルは【タヴィストック・クリニックの原点と発展: マーサ・ハリス with 山上千鶴子】です。詳しくは <http://koderia.or.jp/seminar.html> をどうぞご覧ください。



振り返りますと、1970年代の彼地ロンドンで私は、マーサ・ハリスを始めとして多くの方々から恩顧をこうむりました。かつての上司ジョン・ブレンナー(Mr. John Bremner)がおっしゃられたくいつか日本の子どもたちのためになれば・・>という言葉がふと脳裏に蘇ります。そのようにして、私は彼地で育てられたのであります。今ここにこうして翻訳出版が実現化されましたことにはさまざまな人のさまざまな想いがぎっさり詰まっていると申してよろしいでしょう。

本書は、なかなかユニークな子育ての本でありまして、イギリスでは勿論、イタリア・スペイン・フランスなど諸外国に於いても翻訳出版され、ロングセラーになっておりますようです。

そもそも1969年初版では親御さん向けの啓蒙書であったわけですが、現在ではどちらかという心理臨床を専門にころざす訓練生たちの「バイブル」として熱烈に支持されているといえましょう。読み進むうちに何やら‘心が耕される’といった味わいがじわじわと募ってまいりますし、‘ほっこりする’ような読後感がございます。面白く読んでいただけるかと思われまふ。訳者としてましては、このささやかなマーサ・ハリスの子育ての書を、教育・福祉・看護・心理臨床など各フィールドで対人援助に携わる専門職の皆さま方にそして一般の親御さんたちにもぜひお勧め致したく思っております。

取り敢えず、私のWEBサイトを日頃ご愛読くださる方々に向けて、本書に於いて私がマーサ・ハリスへの想いを綴りました「訳者あとがき」をここに掲載することと致しました。この拙い文章が皆さま方お一人ひとりのマーサ・ハリスとの出会いのきっかけになることを願っております。そしてもしもお気が向かれましたら、いずれ読後のご感想なりを当方に(E-mail; info@chiz-yamagami.com)お聞かせいただけますならば大変嬉しく思います。

(2016/10/17 記)

《児童分析家の語る 子どものこころの育ち》

マーサ・ハリス著/山上千鶴子訳 岩崎学術出版社 2016

【訳者あとがき】

献 花 —マーサ・ハリスの魂に—

私は1970年代の或る時期、ロンドンの【タヴィストック・クリニック】に於いて、Mrs. マーサ・ハリスという‘母鳥’の懐に抱えられた‘幼い雛’の一人であった。彼女を偲ぶとき、ふいと繁殖期に草叢で雛たちを育てるハイロガンのメス鳥を髣髴させる。もし外敵が接近しようものならば、甲高い声を響かせ、羽根を拡げて猛然と威嚇のディスプレイをする。断然そうした気丈で毅然とした揺るぎなさ（competence）、それこそが彼女の真骨頂であった。たおやかな笑みを湛えながらも、その凜とした佇まいのマーサ・ハリスを思うとき、ごく自然に私は‘子ども’になってしまう。彼女の逝ってしまった年齢をはるかに追い越してしまっているというのに…。あの頃に彼女を私がどれだけ熟知していたかと問われれば、実はまるで知らずにいたと答えるしかない。‘雛’にとって‘親鳥’とはそうしたものだ。そのまなざしを背に、振り返りもしない。時折その懐にヒョコヒョコと戻ってゆき、慰藉を与えられることはあっても、概して己の目線に映る外界にすっかり魅了され、それであちこち心の赴くままに地面を啄ばみながらほっつき回っているだけ…。当時の私はそんなふうだった。でも時移ろひて、今あれこれと回想のなかのマーサ・ハリスの面影を手繰り寄せると、私は彼女を知っていたと言えなくもない。例えばその一つがこんなこと…。私の敬愛する明治生まれの女流詩人【永瀬清子】(1906～1995)の自伝エッセイのなかにこんな文章があった。

美緒がよちよち歩きのところ、銭湯へ行った帰り道、いつものように空き地のある裏通りを帰ろうとすると、美緒は一向についてこようとしないで、自分の好きな方へずんずん歩いていく。駅前のにぎやかな通りへ向かっているの、私は銭湯の道具を持っているし、買い物のもりもないし、「ミオちゃん、おうちはこちらよ」と呼んでも、聞かずによちよち歩きで向こうへ行く。私は何度も呼びながらふと急に淋しさに打たれた。そうだ、彼女は今まで自分と一体なのだと思いこんでいたが、そうではなくて小さくても一人の人なのだ。この事をこれから忘れちゃいけないのだ、と愕然と思いついた。それまでかわいかわいと思って書いていた詩のノート、それはその日かぎり書けなくなった。……

(『すぎ去ればすべてなつかしい日々』 P.82 福武書店 1990)

要するに、わが子に‘他者性’を感じるといったこと。この真に‘近代的’ともいべき感性には目を瞞るばかりである。彼女は【与謝野晶子】(1878～1942)に深く心酔し、『青鞥』創刊号に掲載された昌子の詩「そぞろごと」のなかで〈一人称にてのみ物書かばや〉と、近代女性の自我を見つめ、その解放を謳った詩の一行は、終生彼女の胸に刻まれて消えることはなかった。そしてここからマーサ・

ハリスに思いを馳せると、この感性こそが実にマーサ・ハリスなのである。誰もが皆、‘個なる一人の人’であるということ。であるからして、親というものはいつか子に背かれるもの、そう観念することが求められる。一体であると信じていた幼子が、いつか自分から離れてゆくのを見るとき、淋しさと驚きに胸打たれる。その‘他者なる者’との気づきに心が痛む。当然ともいえよう。あちらも一人の人なら、残された自分もまた一人の人である。その現実を従容として甘受する。この‘親鳥’の潔さ、それこそがマーサ・ハリスの真面目と思われる。その懐からどれだけ多くの人たちが巣立っていったか知れない。そして彼らは世界の各地で尚も羽ばたき続けている。今や‘親鳥’として・・願わくは私もまたその一人と思いたい。

私が【タヴィストック】でのチャイルド・サイコセラピスト養成コースを修了し、資格認定を受けた折、彼女はあの柔らかな微笑を湛えて、<チズコは日本に戻られたら、パイオニアにおなりなのね>とおっしゃった。日頃の彼女に似合わない、ちょっとはしゃいだ感じで・・。その華やいた声音にどこか微かに私への気遣いが、そしていたわりが感じられた。彼女は私の未来に何を夢見たのだったろうか。もはや手の届かぬ遠い異国で孤軍奮闘するであろう私の姿を一瞬思い、それが外に向けての闘いでもあろうけれど、間違いなしに内的な闘いにもなることを彼女は察していたのだろう。その試練に耐えられることを祈り、そうした未来の私にレスペクト(敬意)を惜しまなかったものと思われる。そこではもはや「タヴィストックの伝統」も、彼女個人ですらもはたしてどこまで意味を持つものやら心もとないのは重々承知していたものと思われる。だから去り行く私に対して彼女は飽くまでも慎み深く謙虚であった。私もまた彼女に何ら返す言葉を持たず、ただ曖昧に微笑したのみであったのを憶えている。帰国後の私の未来なぞ実に曖昧模糊としたものでしかなかったのだから・・。どちらかというと言われるのを苦手とし、むしろ単独者でありたい私には、その当時からマーサ・ハリスを模範とするなど到底無理なことと思っていたし、その彼女を日本の心理臨床家のみなさん方に是非にもご紹介しなくてはといったことにも頓と興味が湧かなかった。その恩義にいつか報いねばならぬといった思いも棚上げにされたままで・・。何よりも精神分析家としての私が此国に根づいてゆくことが肝要であり、そのためにも臨床の場に於いて私の日本語の‘開拓’こそが急務とされた。そしてそれ以後、なんと35年余の歳月が過ぎ去ったわけだが・・。

そんな折、思いがけなくもマーサ・ハリスのこの本の翻訳出版の話が持ち上がった。マーサ・ハリスの日本での‘デビュー’にもなるわけだから、それには心が動いた。私の中のマーサ・ハリスは、その語ることば(英語)と切り離せない。それを私の語ることば(日本語)に翻訳して果たして大丈夫かと危ぶんだ。確かにこれまで試みとして彼女の主要論文を幾つか私のWEBサイト《山上千鶴子のホームページ》(<http://www.chiz-yamagami.com>;「タヴィストックからの贈り物」)に翻訳してアップロードしてはきたけれども、彼女の著作の翻訳出版ともなれば心が臆す。彼女の語り、その‘筋立て’として理解されるのみならず、読者にその‘情味’をどのように伝えられるか。それが問われると思った。そして何よりもマーサ・ハリスに独特に備わった「心の握力」が伝わってゆくことを願った。そのためには、彼女を‘なぞる’ばかりではなく、そこにマーサ・ハリスの英語表現では語られていない、字面の向こうにある、つまり

は彼女独特の‘感性’の領域に分け入り、そして彼女の真意としたものを忖度し、出来る限り情味溢れる日本語で語ってみたいと願った。どこまで成功したか心もとないが・・。

ここで唐突だが、わが母のことを語りたい。去年の暮れ、母は他界した。そろそろ死期が迫っているとの報を受け、急遽私は母の入居している琵琶湖畔のグループホーム『みちくさ』に駆けつけた。<お母さん、チズコです！>と告げると微かに母は目を開けた。手を握るとぬくもりがある。間に合った！と私は安堵した。私は母の手を握り、そのぬくもりの感触をしばし味わい、ゆっくりと撫で回していた。すると、ふいと母の手が私の握る手の内から逃れた。室内は暖かであったし、手の感触を暑がったのかと一瞬思う。それからややあってその手を軽く握りなおし、さすってあげていた。すると、またもやその手は私の握っている手から逃れた。何やら私の手を押し返すような、そこに一瞬はつきりと母の意志が込められているのを感じて、私は凝然とした。まだその頃には、訪れた姉やら妹からの報告によると、握っている手をほどこうとすると離すまいとする握りがあると聞いていたわけで。ところが母は私の握る手を握り返そうともしないし、それどころかむしろその握られた手を押し遣るのだった。まるで突き離されたみたいで、思いがけないことに一瞬私の頭は混乱した。ところが冷んやりとし、傷ついた。しばし母の安らかな寝息の傍らで呆然としていた。それから少し気持ちを鎮め、想いを廻らしているうちに気づいたことがある。母は訪ねてきた私を大きな笑みで迎えたけれども、やがて何やら怪訝な表情がその顔に浮かぶことがあった。勿論何も言わないのだが。どうやらくなんであなたはこんなところに居るの？原宿に戻って、仕事頑張りなさい>って言われてる！その都度そんな気がしたのだった。なるほど、そういうことなのかと改めて思った。母はいつも私の仕事を気に掛けてくれていた。<もういい。私のことはもう案ずるに及ばない。あなたはあなたを生きなさい。患者さんを大事にするのよ>って諭されたようだった。認知症を患い、見当識の衰えのなかで、それでも尚母の何やら凛とした勁さに触れる思いが一瞬した。そして突き離されたことで、やがて私の気持ちもシャンとした。お蔭で原宿に戻り、仕事に打ち込む覚悟が定まったのである。やはり母はわが母であった。その最期に於いてすら私は母に付き合ってもらえた、有り難かったという思いが真底した。そうした折に、『岩崎学術出版社』から知らせが届き、企画会議でこの本の翻訳出版にゴー・サインが出たとのことだった。まだ母は尚も持ち堪えてくれていたから、身罷る前に直接会ってその喜びを告げることが出来て、私は深く安堵した。生前の母親の口癖は<世の為、人の為>というのであった。いつか娘の私がそうなることを願い、それでタヴィストック留学を支援してくれたわけだから・・。そして今、改めて思う。私は母に託されたのであり、もしかしてこの翻訳出版ですらも、その母の夢・祈りの実現化の一つではなかろうかといった意識が募る。

ここで改めてマーサ・ハリスに思いが及ぶ。彼女は1984年海外講演旅行中に車の事故に遭い、脳損傷を患う。身体を自由を奪われ、無念にも言葉をも奪われた。その後ご家族の手厚い介護を受けながら、リハビリに励んでおいでだったと伺う。そして、1986年の11月に心臓麻痺で身罷られた。その折のことを、娘のメグさんが【タヴィストック】での《マーサ・ハリスを偲ぶ会》の席で語っておられる。<家族の気持ちとしてはまだ希望があると思っていたわけです。でも母は、もう快復の見込みがないと悟ったとき、生きることを思い切ったのです。そして別れを告げたわけでありまして>と・・。私はそれを聞

いたとき、よく分からなかった。でも今なら分かる。<もう私は充分よ。だから、あなたはあなたを生きてゆきなさい…>ということであつたろう。マーサ・ハリスは、無論のこと私の母・山上ツルエとは大いに違う。でも、そのどちらにも‘親なるもの’のレジリエンス(つよさ)がある。いのちを孕むもの、いのちを育てるものとしての…。それは、言うなれば「いのちの繋がり」への‘樂觀’でもあろう。かくして今や‘いのちのバトン’は後続の私たちに手渡されたということになる。そしてわれわれ娘たちは、取り敢えず‘母なるもの’の夢・祈りを継ぐこと(はげ)に励む。マーサ・ハリスの娘であるメグ・ウィリアム・ハリスが敢えて2011年に、マーサ・ハリスの生前書き著したこの小さな本(初版1969年)を装い新たに、マーガレット・ラストインの「巻頭言」をも加えて再版したのにはおそらくそうした意味があろう。ここにその翻訳出版が日本で実現したことに私個人としてはどうやらメグさんと‘共闘’できたみたいなの、そんな感慨を持つ。

人はおそらく誰も、「生きられた私」をこころに抱き締めながら、彼岸へと旅立つものなのであろう。わが老いし母の傍らに寄り添い、娘はその死をそのようなものとして看取りした。かつて母が書き綴った『自分史』のページを繰りながら、さまざまに昔を懐かしみ思い出を語ってあげた。今では母の形見となった短歌集『茜の譜』を読んでやりもしたし、そして懐かしい郷里の秋田民謡の賑やかなお囃子を耳元で聴かせてあげたりもした。部屋には母の記憶を慰めるため、セピア色の家族写真が所狭しと飾られていた。その死とは亡き父がようやく母を迎えに来てくれるという意味であつたから、救いかつ安堵以外の何ものである筈はなかつた。そしてことごとく予定調和的に幕は閉じられた。だが、その慰めとは裏腹にふと一抹の疑念(かす)が頭を掠めた。ほんとうにそうかと…。母の死をまるで‘ユズリハ(譲り葉)’にも似たふうに予定調和的に片付けようとしていないか。その己の裡に独善的な‘エゴ’が透けて見える。何やらがズキンと胸を刺した。痛い！そしてもの悲しい！ここでふと思ってみる。所詮は誰の人生にも、‘手付かずの真っ白い空白のページ’が残ると言えはしないか。「生きられなかった私」というものに思いを馳せ、猿(や)とした遣(せ)る瀬(せ)無(な)さを感じることもありはしないか。無念にも66歳で儚(はかな)くなられたマーサ・ハリスは言うに及ばず、寿命(じゆん)尽きて穏やかに92歳(ぼつ)で歿(かた)した亡き母についてもそれは想像(うれ)に難(かた)くない。そろそろ古希を迎えんとする己自身にしたってそうなのだから。唯私の場合、それは憂(うれ)いとも嘆(なげ)きとも言えない。<仕事に託(たく)した一生、それも善(よ)し！>との声が胸裏を過ぎる。だが、その仕事にしてもごくごく限られた領域(たぐ)でしかない。だからこそあなたに託(たく)したいという思いが沸(ふ)々とわく。あなたのなかに「生きられなかった私(たく)」を託(たく)してはいけないだろうか。ここに「いのちの繋がり」への樂觀(ゆえん)が強調される所以である。

ここに再び詩人【永瀬清子】に登場してもらおう。その内なる「近代自我」の目覚め(うめ)に呻(きし)きやら軋(よ)みを抱えながら、それでもほっと一瞬(ゆ)弛(ゆる)むときの母としての「永瀬清子」の表情が私にはとても好ましい。我(われ)子(こ)らを描(えが)いた数(た)少(せう)ない詩(し)篇(へん)のなかの一つがこれ…。際(さ)立(た)って逸(い)品(ひん)である。ここに透徹(てうてつ)した「いのちの繋がり」への信(しん)頼(らい)がうかがわれ、私はほっこりと心(こゝろ)慰(なぐさ)められた。

鷹の羽

子供は山で一枚の大きな鳥の羽を拾つて来た。
それは美しい不思議なだんだらがあり
あたかも生気にみちた自然からの
飛沫のようにつやつやと光っている。
これはたしかに鷹類の羽にちがいない。

富士の見える松の木の
高い所に棲んでいる。
目玉のギロツとしたあの鳥にちがいない。
風と共に空を翔けり
獲物を発見するや急降下してくる
あの壮んな鳥のものにちがいない。

お母さんは小さい時に読んだ。
金色の羽を拾つたために
数々の冒険に出あう若者の
長い運命的な物語を。
あれは多分スラブの民話だった。
たしかに鷹の羽をみていれば
勇敢で冒険的な、
矢のようにはやる気持が湧いてくる。
子供よ。
お前は珍しいものを拾つて来て
うんと元気な子になりそうだ。
お母さんの知らない世界をどンドンゆきそうだ。
お母さんに出来なかつた事を沢山しそうだ。
頬の紅い子よ
我子よ。

〔『永瀬清子詩集』 思潮社 1979〕

この詩は「いのちの繋がり」への讃歌ともいえよう。母親のなかの「生きられなかったわたし」は子どもに引き継がれていき、そしてその子のなかでいつか「生きられたわたし」になっていくことであろうか。それに母・「永瀬清子」は希望を託している。この骨太の‘明治女’の実直さ・健気さを褒め称えたい。実にブラボー！である。そしていつか子どもらは今や己自身の享受している「生きられたわたし」に思いを致し、母への恩義にどれほど感謝することか。だが同時に、なぜか幾ばくか‘疾しさ’を覚えずにいられないということもあろうか。

その昔、わが母は一度ならずく私も精神分析受けたい・でも、家族はダメなのよね・>って私に尋ねたものだ。私は笑って取り合わなかった。だが一瞬、その声音に冗談ともいえない、真剣味を帯びていたことに内心ギクツとし、ちょっと慌てた。母は私にとって母以外ではなかった。それで十分なわけで、それを超えての‘個なる一人の人’としての彼女を顧みることはなかったといえよう。それは唯なにやら困ったことなのだ。それに気付いたとき、己の内に身勝手な‘子どものエゴ’を思った。わが母以外のものとして思いが及ばない。結局のところそれが自分に都合がいいということになる。<お母さんのこと、本当には何も知らなかったのかも知れない・>などと認めることは今更ながら辛い。あんなにもたくさん一緒だった、そうした記憶をお互いに持つことができたのだから・。でもやはり<お母さん、ごめんね>と詫びたいような、そんな悔悟の念がこころに疼く。

子どもにとって親が‘一人の人’であること、親にとって子どもが‘一人の人’であること、その事実はなかなか容認し難いものである。セラピイの眼目となるのは常にそれであるわけで・。日本の家族主義がそれをいっそう阻んでいるのも事実だが。概して家族というのは、夫婦、そして親子、そして子どもら同士もまた、それぞれが自分らしく生きようとするならば、たとえどんなに互いに歩み寄ろうとしながらも、時にはそれぞれのエゴが剥き出しとなり、互いに互いを縛って離さない、そして侵蝕し合うことになりかねないのは必定である。そこに人としての愚かしさも醜さも、だから‘罪’もまた蔓延ってゆくことになろう。家族同士どっちもどっちで何らかの犠牲を強いることなど金輪際あり得ないというのはむしろ嘘っぽい。それはそれでいいとも言える。そうでなければ擦れ違いばかりの水臭い関係で終わるしかない。それは無意味であろうから。であるからこそ、たくさんたくさん赦し、つまり<ごめんね！>が求められる由縁とも思われる。それは幾らか緩衝の役目ともなろう。そうであったとしても、悔恨の念は癒され難く生じる。それが家族という場であることを肝に銘じたい。取り分けて母親という存在には往々にしてほろ苦い懊惱が纏わりつく。<哀切の情止み難し>といった具合に・。家族の中でどれほど忍従が強いられていたか。その忍従を美德とし、それで女たちがどれほど一途にひたむきに健気に生きたとしても、そうだとしたら尚更のこと、子どもの眼には母の姿は言い知れぬ不憫さを催すものなのである。かつて母とは誰にとっても‘泣きどころ’であった。実にそうであればこそその‘値打ち’があったともいえるのだが・。

ここにもう一つ、詩人・【永瀬清子】が母親を詠った詩をご紹介します。

母と言うものは不思議にかなしいもので
私の意識の底ではいつも痛みを伴っている
母はつらいやさしい
夢みたいなもの
眼がさめてもいつでも神経がおぼえている
そこから逃れてどこへ自由に行く事もできない
私を捕えなつかしい思いでしぼる

(『すぎ去ればすべてなつかしい日々』 P.84 福武書店 1990)

読みながら目頭^{めがしら}が熱くなる。かつて時代は女性たちに苛酷であった。そして今やそうした母の世代を乗り越え、女の憐れさ・不憫^{あわふびん}さを払拭しなくてはというのがわれら娘世代の悲願となった。私の場合も、遡ればごくごく幼少の頃から <お母さんを守らなくては・・・>という思いがあった。人一倍強かった。おそらく母親の郷里に居た頃で、父親が単身赴任で不在であった時期かと思われるが。確か母はその頃男児を一人死産している。それ以降も私はずっとそうした気持ちを心の奥深く引き摺ってる。そうだからなのか、心理臨床家となつてからの私は「女性たちの味方」を内心自負してきたともいえる。ふと気付いたことだが、それに加えて近頃ではどうやら「男性たちの味方」をもやれている自分が居る(!)。何だか妙に喜ばしい。「女の味方」になれる男」、それこそ掛け替えのない男の値打ちの一つと私は固く信じている。それってまさしく‘タヴィストック譲^{ゆず}り’だろうけれども・・・。女たちが、女の味方にならなくてどうする?!そして男たちを味方に付けられずにどうする?!真底そう思うから・・・。

さて、実にこの話はマーサ・ハリスと無縁では決してない。時折彼女はこの本書のなかで自伝的エピソードを匿名で挿入している。娘のメグさんのWebサイトに掲載された「マーサ・ハリス評伝」に照合すると、それが分かるのだが。マーサ・ハリスは、スコットランドで農場を営む両親の長女として誕生している。その母親なるひとは、その娘時代は進取の気性に富み、覇氣^{はき}に溢れ、地元でも際立った存在だったらしい。ところが、マーサが6歳になるかならないぐらいの頃、母親は4番目の子ども(男児)の出産後健康を著しく損ね、それ以来の15年間というもの、抑うつ的であったり身体的な病を抱えたりで床に臥す^ふといった時期が続き、従って家事全般を取り仕切るのは往々にしてもはや困難といった状態となる。そこで彼女の下の子で未婚のキャシー叔母さんが姉の幼い子どもたちの養育に手を貸すようになっていった経緯が知られる。キャシー叔母さんは、子どもたち銘々の成長に大きな関心を寄せ、そのうち子どもたちはこの叔母さんを‘二番目の母親’^{みな}と見做すようになったということのようだ。姉夫婦の子どもたちに骨身を惜しまずに献身し、自立した職業婦人だったキャシー叔母さんは〔訳註;タイピストであつたらしい生涯独身をとおしたということらしい。病弱な母親そして幼い弟妹たち、なるほど、ここにマーサ・ハリスの‘泣きどころ’があつたと言えないか。そしてマーサ・ハリスの持ち前の不羈^{ふき}独立の精神はキャシー叔母さん譲りでもあつたらうか。ここから断然彼女は「女性たちの味方」になるべくしてなつたと言えよう。かくして彼女は、学校教師というキャリアから【タヴィストック・クリニック】との縁に繋がり、やがてDr. ジョン・ボウルビイの厚い信任を得て、Mrs. エスタ・ビックの後任としてチャイルド・サイコセラピスト養成コースの統轄に抜擢され、そこから【タヴィストック】は革新へと大きく舵取りされてゆく。研修セミナーが教育・福祉・医療といった現場で働くひとびとに向けて門戸を開かれていったのも一つだが、何よりもまだ当時「チャイルド・サイコセラピスト」という職種は揺籃^{ようらん}期で社会的認知には至っていなかったわけだが、そのアイデンティティーの地盤固めのため彼女は獅子奮迅^{ふんじん}の働きをするのである。当初そのコースは圧倒的に若い女性たちで占められていた。マーガレット・ラスティンの【巻頭言】からもうかがわれるように、かつての教え子たちの彼女への敬慕の念は絶大で熱烈である。そして今尚もそれぞれの胸の裡にマーサ・ハリスは‘導きの星’^{さんぜん}として燦然と輝いている。傍らに彼女らを見守っていた【タヴィ】

の‘父鳥’、われらの心優しき英国紳士・Dr. ジョン・ボウルビイの存在も忘れてはならないわけだが。そうしたキャリアはまさしく彼女が「女性たちの味方」であることを証した生涯であったことを示している。その軌跡を辿ると、実に腑に落ちる思いがする。そして彼女の秀でた「心の握力」には、長年に亘る精神分析的鍛錬と相俟って、実に「女性たちの味方」たらんとしたの願掛ける姿勢がうかがわれる。彼女が書き著した論文のどれを取っても、そうした‘魂の叫び’がそこに一貫して通奏低音として聞える。勿論この本書も含めて・・。

ところがもう一つ、マーサ・ハリスがその生涯を「女性たちの味方」そして「子どもたちの味方」として生き抜いた理由があった。‘贖罪’である！本書から新たにそれが推察せられ、内心喝采した。彼女の自伝的エピソードの一つ、サンタクロースの真相を暴いた子どもの頃を回想する青年期の女子の話のなかに(第9章)、その当時アンデルセンの童話『雪の女王』に痛く入れ込んだ幼いマーサが触れられている。その愛着のなかに雪の女王との同一化がどうやらうかがわれる。雪の女王、すなわち‘死’の呪いである！その頃ちょうど彼女の母親は4番目の子どもを妊娠していた。やがて弟は誕生するのだが、母親は産後の肥立ちが悪く、病の床に臥す日々が続いた。この一連の深刻な出来事に、無意識裏に幼い彼女は己の罪を胸深く刻んだ。深く震撼したはずである。産まれてくるはずの弟への‘呪い’が母親に及ぼした‘脅威’はあまりにもリアルであったろうから。すなわちこれが、後日彼女が知るところとなった、幼い女の子の中に芽生える母親に向けての‘羨望’（まさにメラニー・クラインいうところの）とおぼしきものである。その後の「クライン派精神分析」との彼女の因縁は、遡ればここに原点があろう。アンデルセン名作『雪の女王』は、雪の女王に攫われたカイという男の子と、その彼を捜し求めて旅を続け、ついに氷の城に幽閉されていた彼を尋ねあてる、幼なじみのゲルダという女の子の物語である。そしてカイの心臓に突き刺さった氷の棘がゲルダの熱い涙で溶け、愛は蘇り、そして雪の女王(死)の呪縛から解き放たれるというのが話の筋である。ここでのゲルダは‘贖いの力’を象徴している。「贖い」とはすなわち‘死の囚われ’からのいのちの奪還である。これこそが「精神分析」の‘エッセンス’と言っても過言ではない！詰まりのところ、マーサ・ハリスは「ゲルダ」すなわち‘贖いの器’になるべく運命づけられたといっている。そして、これは彼女の精神分析家及びチャイルド・サイコセラピストとしての立脚点でもあったろう。ごくごく個人的(パーソナル)な‘受難’から‘贖いの道’への転換、そうした生涯を賭しての願掛け、その一途な熱き思い・・。誠にマーサ・ハリスの活力の根源をそこに見る思いがした。だが、彼の地イギリスに於いてこうしたことが語られるのを私はついぞ耳にしていない。マーサ・ハリスはこの点に於いて実に稀有と評している。実に掛け替えの無い、固有な特異性として讃えたい。

そもそも子育てとはまさに「愛別離苦」の端緒であり、いのちには‘滅び’が付き纏う。それゆえに心の痛みをひきずるものとの理解をマーサ・ハリスは淡々と語っている。しかもそれを彼女はポジティブに語っているように思われる。切っても切れぬ親子の因縁なるものも、互いの‘エゴ’同士がぶつかり合い軋めくのは避けられまい。だからといってニヒリズムへの傾斜は剣呑といえよう。尚も彼女の言うところの「一緒にあることの経験 the experience of togetherness」を諦めたくはない。所詮誰しもが「生きられなかったわたし」という空白のページを抱えて彼岸へと旅立つものなのだとすれば、だからこそそれを

埋めんとして親が子に期待するのも、また子が親に期待されるのも、ためらったり^{ひる}怯んだりすることがあってはならない。そんなふう^{おのれ}にそれぞれが己の人生を紡ぐところの‘さだめの糸’は^{つむ}縋り合^よってゆくのだろうし、それこそが生きる妙味なのだろうから。「親になること・子であること」を唯の苦勞^{やっかいごと}やら厄介事として観念する^{わび}というのも侘しい。どこかに希望^{ゆる}が欲しい。そして‘救し’が希求される。そこに<あなたが一緒にいてくれて良かった！>、そしてだからこそ<わたしがわたしで良かった！>との声を聞きたいわけ^{ひるがえ}で。。。

翻^{ひるがえ}って今やそれは私にとって、わが^{もら}貰^{えにし}い^{えにし}受^{えにし}け^{えにし}たいのちの縁によって託されたものの自覚に目覚めることを意味する。因みに、かつて時として^{しお}萎れ^{しお}そうになる私に、わが母は<あなたは私が見込んだ娘なのよ。。>と言って励ましてくれた。その声^{ふる}が私を奮^{ふる}い立^{ふる}たせる。マーサ・ハリスの「生きられたいのち」を少しでも継承できたらいい。さらにはその「生きられなかつたいのち」をも生きてみたいと願う。結構それって‘野心的’なこと。すなわちその一つが日本語で‘精神分析的思索’を試みよう^まとすること、まさにそれである。そしておそらくこの訳書はそれを意味していなくもなからう。取り敢えずこうした翻訳を借りて、マーサ・ハリスの‘ことばの種’が日本語という^ま土壤^まに蒔^まかれてゆく^まと信じたい。これがいかなる人の手に渡るのか知る^{よし}由^{よし}もないけれども、手にした人が、そこに‘いのちを吹き込む言葉’を見つけ、日々の人との出会いのなかで、その相手が誰であろうと、いつかそのような‘いのちある言葉’を語れるようになることを願う。飽くまでもそれぞれが己自身に深く根づいた日本語で。。そこに紛れもなくマーサ・ハリスから手渡された‘親なるもの’の真価^{そむ}があろうから。かくしてここに、わが身を「いのちの繋がり」に背^{そむ}くことなく、マーサ・ハリスに寄り添^{かろ}わせることができたことで私もまた「生きられなかつたいのち」が「生きられたいのち」へと辛^{かろ}うじて幾分なりとも変容されてゆくような感触を心嬉しくも覚えた^{そむ}と言っていい。このわが^{つたな}拙^{つたな}き文章を亡きマーサ・ハリスの魂への‘献花’^{そむ}としたい。

この本の翻訳作業は私にとって‘内なる対象’としてのマーサ・ハリスとの対話(ダイアログ)となった。とめどなく彼女に語りかけられる、この嬉しさ！そして、もしマーサ・ハリスがあなたにとって何らかの意味を持つとしたら、これ以外にはない。すなわち、あなたは‘語りかけられる人’になるということ。そして、ここに至ってようやくしてどうやら私も‘誰かの親’に大丈夫なれ^{そむ}そうな気がしてきた。‘誰かの子ども’でいられた幸せと嬉しさを胸に。。かくして、<さあ、あなたの出番よ！(It's your turn!)>と呼びかけるマーサ・ハリスの声に私は背中をトンと押された気がした。そしてこれから尚もその励ましの声を私は聞いてゆくのだろう。そうであればこそ、生きられる私がいるとも思われた。

最後に、この本の翻訳出版にあたり、京都在住の【御池心理療法センター】代表の平井正三先生のご尽力を得たことを記しておきたい。此の度、こうして《タヴィストック・ファミリー》の絆^{きずな}に頼もしくも支えられたことに心躍る。謝意を表したい。さらに、「岩崎学術出版社」の長谷川純氏にも多大のご配慮^{きずな}そして数々の心温まる励ましを頂戴した。謹んで深謝したい。

2016年6月 ^{あじさい}紫陽花の雨にけふる頃に

附・メッセージ

人のこころを育てるプロフェッショナルのあなたへ
わが子を慈しみ、共に生きんとする親なるあなたへ

マーサ・ハリスが呼びかけている、
思い出してごらん！・・と。

ここに懐かしい自分が、‘子どものわたし’が蘇る！

‘記憶にあるわたし’、‘記憶にないわたし’、
それらのどれもがすべてわたしのうちに息づいている。
何ひとつ失われてはいない。

あの痛み、そしてあの喜びが目覚める。
それらを糧としてわたしのこころは育ってきた。
そのことがよく分かる。
そして、今のわたしが生きていることも・・。

思い出そう、‘子どものわたし’を。
その涙も笑いも・・。
もう一度、深く胸に抱えよう。

(訳者より)